

## 第1-1部 パネリストによる基調報告

### つながりと再生

**吉田 恵美子**

(特定非営利活動法人ザ・ピープル理事長、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンターセンター長、いわきおてんとSUN企業組合代表理事)

#### 【横田】

本日は「人権シンポジウム in いわき」に御来場いただき、ありがとうございます。今回のシンポジウムは、『震災と人権』というテーマで行います。

平成23（2011）年に発生した東日本大震災においては、ここ福島県いわき市も、地震、津波、そして福島第一原子力発電所の事故により、非常に大きな人的、物的、そして精神的被害を受けられました。3年半が経った現在も、いまだに多くの人々が十分な救済を受けられずに、困難な生活を強いられているということに私どもは心を痛めております。

被災された皆様の人権が確実に守られ、一日も早く安心して将来に希望が持てる生活が送れるようになるにはどうしたら良いのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

本日のパネリストはいずれも民間の立場でいわき、あるいは東北全体に向けての復興支援を行っておられる方々です。それぞれ活動されている分野や団体の性質が異なります。それぞれの特色を生かした活動をしておられるという点で、学べる点が多いと思い、企画をしました。どういう活動をしていて、どういう課題を抱えていて、どういう可能性を秘めているのかについてお話を伺えると、私たちも参考になると思います。そのお話を通じて、真に「心の復興」と「生活の再建」が進むように、心より願っているところです。

会場の皆さんは疑問に思った点を説明してほしいと思われるでしょうから、その際はお手元の質問用紙に御記入いただき、係の者にお渡しください。それらにお答えする形で後半のパネルディスカッションの時間を使いたいと思います。

#### 【吉田】

「ザ・ピープル」を御存じの方がいらっしゃったら手を挙げてください。…はい、ありがとうございます。このように手が挙がるとうれしいです。

「ザ・ピープル」は平成2（1990）年から地域で生まれて地域で育ってきたNPOです。皆さんの身近なところでは、古着のリサイクルをしている団体ということで、「あ、古着を売るお店をやっている団体ね」と思い出していただける方もいらっしゃると思います。でも、それだけではなく「街を自分たちの力で元気にしていきたい」という思いで、長年活動してきました。障がいのある人に関わる部分、国際協力に関わる部分、社会教育に関わる部分、そして災害救援にも関わっております。

「古着リサイクルのスタートは家庭から」というチラシが、皆さんのお手元にあるかと思います。チラシの左肩には「福島県を古着を燃やさない県に」と書いてあります。福島県が「古着を1枚も燃やすことなく、有効に活用する県なんだ」と皆さんに知っていただき、日本に名をはせる日が来ること。それが私たちの長年の望みでした。私たちは毎日毎日、古着をたくさん扱っておりました。年間に25トンほどの古着が私たちのところに来て、それをリサイクルする活動を長年続けていく中で、例えば市内において火災で焼け出されたりする方がいらっしゃると、その方々のために、市の福祉部門に服を提供することが度々ありました。そのような中で、もし何か事があったときには、私たちには救援物資として使う物が手元にあることに気が付きまして、そこから私どもの災害救援という活動の一つが生まれました。そのつながりの中で、東日本大震災に遭遇しました。

いわきにお住まいの方たちに、その日、何があったのかをくどくどと説明す



吉田恵美子さん

るつもりはありません。皆さんと一緒に、私も同じように被災しました。いわき市の被災状況、どれだけの人が亡くなられたのか、どれだけの家屋が被害を受けたのか、それについても皆さんはよく御存じのことと思います。

皆さんが余り御存じでないことがあるとすれば、それは地震や津波によって被災されたいわき市民が、実は仮設住宅に住んでいるのではなく、民間のアパート、県営のアパートにそれまでのコミュニティに関係なくバラバラに住んでいる状況であるということ。そして、市内には3,500戸の仮設住宅が建てられましたが、そのほとんどに原発避難者の方たちが入居されているということ。そのことで、地域の中で「被災」という大変な思いをしながら、立場の違いを生んでしまったこと。そのようなことを思い出していただきたいと思います。今、いわき市内の応急仮設住宅は、市内各地バラバラに散らばっております。これらの仮設住宅には看板が立ててありますから、そこに行けば大変な人たちが暮らしていることが一目で分かります。そのような仮設住宅では、「支援の集中」「他の地域との支援の格差」が生じました。

震災からもう3年半が過ぎました。そのような中で、今更この3年半に起きたことを繰り返し申し上げることはおかしいのかもしれませんが、同じ大変な思いをしながら、支援の格差によって、「何か違うんじゃないか？」という思いを抱く人が生まれてしまっていたという現実を、少し思い出していただきたいと思います。

私たちは、発災直後から被災された方に古着を提供していました。私たちの本部は、いわき市の小名浜地区にあります。小名浜というのは御存じの通り、海に近い浜の部分です。同じ地域の津波被災者の方に、防寒着や靴を提供することによって、避難所で少しでも暖かく過ごしていただきたいと考え、動き出しました。動き出したことで見えてきたことがあります。救援物資が偏っていて、なかなか欲しいものが届かないこと。それから、食べたいと思うものがなかなか食べられないこと。そのようなことを解消したく、私たちは自分たちの持っている手づるを利用しながら、被災者に向かい合う支援事業を始めたのでした。

津波被災者の方たちに何か手助けをしたい。それも、物を届けるだけではなく、その方たちが、自宅に戻って泥かきをし、瓦れきを片付けているところをお手伝いをしたいとも思うようになりました。しかし、一NPOでは津波被災者の方たちから、なかなか「手伝いをしてほしい」という声を届けていただけませんでした。そこで私たちは「お願い」「助けて」と言っていたきやすい立場になると、小名浜地区の災害ボランティアセンターを、(社)いわき市社会福祉協議会が設けた「災害ボランティアセンター」の支部のような形で運営させていただきました。平成23(2011)年の4月から7月の末まで、私たちは災害ボランティアセンターとして、全国各地からボランティアの方に来ていただき、お手伝いいただきながら「被災者の方のために」と動いておりました。7月の末には瓦れきは大体片付きました。しかし、瓦れきの撤去などは一段落しても、収束感は全く味わえませんでした。それは、その頃から市内に原発避難者の方が仮設住宅に非常にたくさん入られて、いわき市民の津波・地震被災者・地元住民と原発避難者の間に、壁が徐々にできていくと感じたからでした。私たちは、災害ボランティアセンターをそのまま閉めることはできないと判断し、今なお、復興支援のボランティアセンターとして、運営を続けています。そして、私たちは、いわき市民の地震・津波被災者、避難者、そして私たち地元住民、その三者が垣根を越えて共につながれるような場づくりをしています。小名浜にあるタウンモールリスポというショッピングモールの一角に、「小名浜地区交流サロン」を設けました。通常、被災地に設けられる交流サロンは被災者の方のために設けられることが多いのですが、私たちの交流サロンはその制約を設けませんでした。どなたでもどうぞ。いわき市民であるかどうか、避難しているかどうか、津波被災しているかどうかとも問いません。誰でも、この地域でつながりが欲しければ来てください、という場にしました。この場は今でも続けております。

私たちは、いわき特有の課題を追って、震災後ずっと走り続けています。一つ目は被災者・避難者・地域住民をつなぐこと。二つ目はまちづくりを水俣<sup>\*注1</sup>に学ぶこと。三つ目はオーガニックコットン

\*注1：水俣病 昭和31(1956)年に熊本県水俣市で発生が確認された公害病。

で農業を再生させること。四つ目は、単体では息切れしてしまいそうなこの震災後の社会問題に立ち向かうために、他と連携することによって力を生むこと。

一つ目の被災者・避難者・地域住民をつなぐという部分では、「みんぷく」という被災者支援のNPOなどが集まり連携組織を作って、そこで様々な活動を行っております。私どもが設けているような地域の交流サロンが、現在、街中の商店の一角にも設けられるようになってきました。そのような場を持ちながら、日常の中に、立場の違いを越えた人のつながりが生まれるようにと心掛けております。

二つ目は、まちづくりを水俣に学ぶということ。私が、震災後のいわきの社会課題で最も大きいと考えているのは、復興の遅れではなく、人間、心、社会のコミュニティの復興の部分です。私たちは、この課題を学ぶ中で、“先進地”についても学びたいと考えました。実は震災後、チェルノブイリ<sup>\*注2</sup>に学ぼう、広島<sup>\*注3</sup>に学ぼう、中越<sup>\*注4</sup>に学ぼう、阪神・淡路<sup>\*注5</sup>に学ぼう…私たちは過去被災地となった様々な所に、復興について学ぼうとしてきました。しかし、私はこのいわきで最も学ばなければならないのは「水俣」だと思っています。地域の中に様々な立場の人が生まれたことによって、地域のコミュニティが壊れてしまっている。それを何とか復旧するために水俣のまちで行ってきた、人と人とのつながりのつなぎ直し「もやい直し」という取組を私たちはいわきでも行わなければならないのではないかと考えています。そのために、私たちは水俣から講師をお呼びして話を聞き、毎年夏になると、いわきから水俣に中高生を派遣する事業を続けております。

それから、三つ目の農業再生。「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」というのを聞いたことはありますか？新聞などでも何度か取り上げていただいたので、もしかしたらお目に留まったことがあるかも知れません。今日私がこのスーツの下に着ていますが、そのプロジェクトで生まれたTシャツです。震災後、食料となる作物を作っても買っただけにないという理由で農業を辞めてしまう農家さんが出ました。それは震災直後、放射能というよく訳の分からないものが、自分たちの大切な農地に降り注いできた。そのことで、自信を持っていたはずの土が、このまま使っても大丈夫かどうか本当に分からない、種をまいてよいかどうか分からない、そう言って悩んでおられる農家の方たちの様子を目の当たりにしました。それに対して、市民活動的な手法で何とかできないかと取組を検討し始めました。私たちは、自分たちが長年関わってきた「繊維製品になる作物」を作ることによって、農業の再生を行っていけないかと考えました。その取組は、今たくさんの方たちをつなぐプロジェクトとして大きくなっております。その中には、地域の方たちのみならず、東京や全国各地からいわきに思いを寄せてくださる方もいらっしゃいます。そして、いわきの課題を解決するために立ち上がった地域のNPOが連携して息切れすることなく進んでいける体制作りを進めようとしています。それが、「いわきおてんとSUNプロジェクト」です。このプロジェクトについて簡単にまとめた動画がありますので、御覧いただこうと思います。

私たちが行っているオーガニックコットンの栽培、別のNPOで行ってきたエネルギー転換を市民の力で行おうというプロジェクト、そしていわきでしか学べないことを市外から来る方にスタディツアーという形で提供する試み、その三つが今一緒に動き出しています。

#### 《 動画 》

私たちがしていることは非常にローテクで手間が掛かることばかり。でも実は、それが人と人をつなぐ。私たちはそれを一生懸命、この地域で実証しようとしています。以上で私の話を終わらせていただきます。

\*注2：昭和61（1986）年にソビエト連邦（当時／現・ウクライナ）のチェルノブイリで発生した原子力発電所事故。

\*注3：第二次世界大戦末期の昭和20（1945）年8月6日、広島に原子爆弾が投下された。

\*注4：平成16（2004）年の新潟県中越地震。

\*注5：平成7（1995）年に発生した阪神・淡路大震災



## 一般社団法人「東の食の会」～Eat, and Energize the East～

高橋 大就 (一般社団法人東の食の会事務局代表、オイシックス株式会社海外事業部長)

### 【高橋】

吉田さんのお話を伺っていて、コミュニティづくりは本当に大事だなと思いました。一方で、それと両輪となる産業の再生があると、私は思っています。私は、今東京に住んでいますが、私の両親とも岩手県宮古市出身で、東北人の血が流れています。よろしくお願ひします。

東京にいる人間に何ができるかと言うと、やはり地元の方だけではできないことをお手伝いしようということです。震災後、壊滅的な打撃を受けた現場を見て、これは一社だけの力で、短期的な解決策は、まずないと思いました。長期的に、産業を興し、食産業に関わる企業が全力を挙げない限り、これまで本当にすばらしい食を生み出してきた東北の農業・水産業・食産業が壊滅してしまうのではないかと。そういった強い危機感を持った私たちは、食産業に携わる者が東京側でできること、「東京側に販路を作ること」を全力でやろうと作った団体です。すばらしい食を作っている生産者の生業をいかに創り、産業を復活させていくかという「食」にフォーカスした取組を行っています。ちなみに私は、漁師や農家の方から物を仕入れて販売しているオイシックス株式会社という企業にも属しています。

さて、被災地の生産者の方々は本当に誇りを持って仕事をしており、震災という大変なことがあっても「かわいそうだから、応援するために買ってほしい」とは思いません。「自分たちが作った本当に美味しい物を、喜んで食べてほしい」という方ばかり。そういった方々のすばらしい食を、全力で売っていくために販路を作ったり、彼らだけでは難しい付加価値を付けていく取組を行なっています。こんなにすばらしい地域を「かわいそうな地域」として記憶されたくない。すばらしい食を生み出して、面白い人たちがいる、ワクワクする地域として認識されればいいなという思いで活動しています。

具体的な取組としては、まず一つは販路を作ること。生産者と東京を中心に売っている企業を直接つなげていくことです。我々は商品を持って回ります。また、月に1回、生産者10社くらいを東京に招き、そこに東京のバイヤーも招いて商品の説明をしながらランチを食べます。その後、生産者とバイヤーをマッチング<sup>\*注6</sup>して個別商談を行います。チャリティーではなく、ビジネスとしてのWin-Win<sup>\*注7</sup>になるマッチングを行っています。被災地の海産物や農産物を直接食べて、互いの思いを伝えた上でのビジネスですので、成約率も高く、大きな取引にもつながっています。

もう一つが、より高い付加価値を付けて売り、生産者の方の収益を増やすこと。それは、ブランディング<sup>\*注8</sup>やマーケティング<sup>\*注9</sup>を行っている人たちと一緒に、どうやったらより高く売れるのか、ということをコーディネートしています。例えば、(岩手県)陸前高田市にJT(日本たばこ産業株式会社)が自社開発し、栽培しなくなっていた新種の米を、権利ごと寄贈したのですが、陸前高田市か



高橋大就さん

\*注6：マッチング (matching)

組み合わせる、コーディネートする。

\*注7：WIN-WIN (ウィン・ウィン)

取引や交渉、提携等を行っている双方にとって利益を得られたり、うまくいっている状態であること。

\*注8：ブランディング (branding)

特定の製品やサービス、更には企業そのものなどを、様々な手法を用いて社会的認知度、社会的価値を向上させたり、維持管理すること。

\*注9：マーケティング (marketing)

製品やサービス等が消費者の基へ届けるための企業等の活動を指す。消費者のニーズ等の市場調査、広報・宣伝、情報の提供・管理、取引先とのより良い関係性の構築などを実現するための手段等。

ら我々に「うまくブランディングして、売っていく手伝いをしてもらえないか」という話がありました。そして、我々がデザイナーと組んで作ったのが、この米（たかたのゆめ）です。高級感を出して、三越さんや高島屋さんで販売されて、少しずつブランドが作られている状況です。また、もともと日本の缶詰は美味しいですよ。もっと高い値段で売れてしかるべきではないかと思っていました。それを東北から売り出したいと思い、販売価格を従来3倍ほど、360円程度でも東京の消費者が買ってくれる缶詰を作りました。「サヴァ（仏語）＝元気ですか？」というメッセージを、東北から送ろうというサバ缶。1年で15万缶くらい売れています。これはブランディングの一つのモデルケースになったと思います。またアカモクという、東京では知名度は低いのですが、東北でよく食べられている海藻があるのですが、我々がマーケティング、ブランディングすることで、認知度を高めて消費者のパイ（分母）を大きくしていこうということで、パッケージをチューブ状にしたりしました。これは居酒屋で、もずくの代わりに出されたりしています。パッケージの可愛さもあって、ネットでも売れています。

また一次産業（農業、林業、漁業、鉱業等）は、震災前から担い手の問題を抱えていましたので、震災を機に、この問題を解決する新しいことができるのではないかと思います。一般的に、漁師は浜ごとにいがみ合ってしまう性質があるといわれますが、ここでは思いを同じくした水産業に携わる人々が地域を越えて団体を作りました。「フィッシャーマン・ジャパン」という団体です。彼らは恐らく日本で初めて、地域を越えて作られた漁師の団体だと思います。

#### 《 動画 》

彼らは、ネット販売や、直接デパートに売り込んでいたのですが、地元では反発もありました。しかし、どうしても彼らは「水産業の未来を作りたい」「自分より若い世代が水産業に入ってこなければ本当に水産業が無くなってしまう」という強い危機感を持って、新しいことに取り組みました。同じ思いを持って踏み出した方は、東北全体では結構おまして、そういった方々をつなげることで、このような素敵な団体ことができました。東京に住む方から見ても格好良く、当然製品も美味しいです。我々はこれを全力で売っています。

我々は、人材育成も行っています。長期的に産業を育てていくためには、地元の人もブランディングやマーケティングを取り入れていかなければなりません。そういったことを学ぶためのキャンプを開催しています。こうして価値のある新しい水産業の担い手作りをしています。

また、食の生産者に全力で感謝をするイベント「東京ハーヴェスト」も行っており、フィッシャーマンたちに農林水産大臣や衆議院議員の小泉進次郎さんと同じステージに上ってもらったりしています。

こういった様々な活動を通じて、我々は30億円くらいのインパクトを生んでいます。目標は5年間で200億円達成ですので、まだまだ足りていません。

産業を復興するためには、もっと日本の企業が東北に投資をするべきだと思っています。そういったことを、官民連携していこうと、平成26（2014）年7月に復興庁と一緒に「東の食の実行会議」を実施しました。食に関わる多くの企業に声をお掛けし、大勢の方に来ていただきました。その場でアクションを決めてしまおうということで、現在も随時活動を続けています。

こういったことを通してさらにスケールを大きくして、東北の産業を本気で復活させたいと考えています。

よろしく申し上げます。

## 市民から発信する意味とは～風化させないために～

白石 草 (特定非営利活動法人OurPlanet-TV代表理事、一橋大学社会学研究科客員准教授)

### 【白石】

OurPlanet-TV（アワープラネットティーヴィー）は、平成13（2001）年に活動を開始したインターネットのメディアです。私はもともとテレビ局で働いておりました。日本のメディアはブームに乗りやすく、視聴率を重要視しすぎるために、扱えるものが限られています。なかなか多様なものが伝えにくい。人権や平和、環境など、私たちにとって身近で大切なことがどうしても陰に隠れてしまう。OurPlanet-TVは「対話による問題の解決を、映像を通じてやりたい」と立ち上げました。地道に活動してきました。これまでの13年間の活動の中で、1,000本ほどのビデオを制作し、私どものサイトに掲載しております。御存じない方がほとんどだと思いますが、去年、よく取材していたある復興庁参事官のツイッターにおける暴言に私たちはいち早く気付きました、映像を作って報道しました。この動きを追って大きなメディアも報道する、ということがありました。私たちが大切にしているのはミッションステートメント<sup>\*注10</sup>の「Standing Together, Creating the Future」という英語です。とにかくみんなで声を上げよう、そしてみんなで立ち上がろうという意味です。大きなメディアに任せるだけでなく、いろいろなツールを使って自分たちに身近なことを記録して、社会をより良く変えていこうというものです。テレビで取り上げにくいような地味なものを、自ら取材することも活動の柱ですが、それよりも重要に感じているのが、とにかく何か伝えたいという人を支援することです。「情報」というと冷たいイメージがありますが、英語だと「コミュニケーション」です。私たちは、コミュニケーションをより深めたいと思う方々を後押しすることもしております。例えば、全国にある社会福祉協議会は、情報発信が非常に苦手であるという悩みを抱えていますが、こういう時代であっても、社会にとって良いことを行なっている、それを多くの人々に知っていただくのはすごく難しい。そこで私たちの持つノウハウを伝えて、より発信力を付けていただいたりしています。私たちは、気持ちが伝えやすい映像というメディアを大切に活動しています。



白石 草さん

3.11（東日本大震災）直後、私たちが最初にしたのは、テレビで扱いにくい全国のボランティア支援情報などを発信することでした。後に、原発事故による子どもたちへの放射能の影響が心配になりますが、テレビは基本的に大人の男性目線で放送されていますので、私たちはなるべく小さいお子さんを持つお母さんや子どもたち自身が知りたいと思っているような情報を流そうと心掛けて配信しています。今年は24時間テレビ（日本テレビ系列）で、（福島県）南相馬市立小高中学校を紹介し、生徒や卒業生が日本武道館（東京）で歌を歌うコーナーがありましたが、これももともと、私たちが注目し取材していたものが日本テレビの方の目に留まったことが一つのきっかけとなりました。私たち自身の動きは小さいものですが、様々な方々に見ていただいて、情報が拡散していくこともあります。

私たちは小さい団体で、専従のスタッフは3人しか在籍しておらず、そこにインターンやボランティア、フリーランスのジャーナリストが加わって一緒に活動しています。とてもマイナーで小さな組織ですので、原発事故のような規模の大きな問題は全くカバーできません。いわきに関する事でも、置かれている立場でそれぞれ考えが違いますし、家族の中、地域の中でも考え方が少しずつ違います。そのような中で「これが答えだ」ということを出していくことは非常に難しいからこそ、当事者が情報発信する後押しが重要だと感じています。昔、「覚せい剤やめますか——それとも

\*注10：ミッションステートメント（mission statement）

企業などの組織やそこに属する従業員等が共有すべき価値観や果たすべき社会的使命等。



人間やめますか——」というCMがありました。薬物依存症の方々は、このようなレッテルを貼られがちですが、実際には回復されている方もいます。回復した方の中には「薬物依存に苦しみ、回復につながる手だてが少ない方々に対し、自分たちが経験した回復へのアプローチをビデオで表現し伝えたい」と考えている方がいます。私たちはそういう思いをサポートしています。震災の問題についても、やはり内側からの視点が欠かせません。宮城県の七ヶ浜の中学校で生徒会の子どもたちと一緒に、ビデオを作った経験があるのですが、子どもたちもいろいろなことを考えているのだと感心しました。例えば、ある子は「避難所で物資がうまく行き渡っていなかった。特に車に乗っている人には届いていなかった」ということに気付いていました。また別の子は「警報が鳴っていたけれども実はちゃんと聞こえていなかった」と気付いていて、一緒に検証しました。子どもたちが感じていたことを映像ドキュメンタリーにまとめ、東京で発表したり、インターネットで世界に発信したりしたのですが、そういう個人の思いを丁寧に発信することが重要だと思います。今、福島県内では、いろいろなことを言葉にしにくくなっているという状況があります。言葉にするというのは高度なことですが、映像なら言葉でなくても伝えられるので、各コミュニティや個人のもとへ行って映像ワークショップなどを行っています。そんな活動の中で生まれたのが、(福島県)飯館村の酪農家の方が震災後の暮らしを記録しようと撮り貯めていた映像をまとめた「飯館村・私の記録」という映画です。今日は、その一般の市民の方が作った映画の予告映像を見てもらいます。

#### 《 動画 》

今、御覧いただいたのはほんの一部で、生活の記録自体はとにかく膨大な量を撮っています。最初、お宅に伺って観させてもらったのですが、私が一番心を動かされたのは家族の団らんで、ごはんを食べているシーンでした。村から避難する前日に、家族みんなで集まってごはんを食べるだけです。でも私たち外部の人間が、マスコミとして現地へ行って撮れるものとは、まったく違う世界が記録されていました。そういう意味では、人々に何か伝えていくときに、こういった当事者目線の記録を撮っていただくということは、皆さんのためにも重要なのですが、やはり外にいる人間にとって重要なのです。今日のタイトルに「風化させないために」とありますが、東京、あるいはもっと西の方に行けば、福島県内とは違い、震災についてのニュースの数は減り、被災地ではどのようなことが起きているのか見えにくくなっています。テレビや新聞で扱われる報道というのは、ごく一面にしか過ぎませんから、被災地の皆様方が普段、感じていること、あるいは起きていることというのを、ビデオで記録して、そして発信して、伝えていっていただくことが、非常に有効だと痛感しています。先ほどの映像は、編集はプロが行っているのですが、そのような連携もしつつ、被災地の様々な面を伝えていただきたいなと思っています。今私たちが運営している「ふくしまのこえ」(<http://fukushimavoicenet>)というサイトがあります。これは「花が咲きました」など、本当に些細な身の回りのことも含めて、今感じたものを映像にして掲載してもらい、多くの人たちに観てもらい、共有する一つのサイトです。今後は一つのポータルに育っていけばいいなと取り組んでいます。

実は、昨日まで東京で「福島映像祭」を開催していました。これは去年から始めたイベントです。先ほど流した長谷川さんの映像は、去年、この映像祭で流したのですが、今年も他の市民の方々の映像をいくつか上映させていただきました。やはり普段東京にいる私たちが取材したものと、被災地の皆さんが暮らしながら感じたこと、スケッチしたものには、かなり違いがあるように思っています。

東北人の気質は真面目で、一次産業も盛んなわけですが、一つこれから力を入れていくとしたら、情報を発信する気持ちを伝えていくことだと思います。昨日もある新聞社の記者が「大阪に取材に行くにあつという間にみんなのインタビューが撮れるけど、東北に行くとは非常に難しい」と話していました。やはり気持ちを整理して伝えるというのは、その地域の人々の気質は多少影響しているとは思いますが、そういう中で、ビデオ・映像という道具を使って、ぜひ発信していただけたらなと思っております。

まとめのところは時間がないので省きたいのですが、一つ重要なのは、先ほど産業についての話もあったのですが、人権という側面で考えたときに、産業や地域振興ということとともに、一人一人がどのように大切にされるか、あるいは声をかき消されないことが、非常に重要だと思います。水俣の話も出ていましたが、水俣も最初の頃、風評被害の問題があり、被害者はなかなか声を出しにくいということがありました。ですので、その二つをどのように両立させていくかが非常に大切で、もし地域の中に分断やすれ違いがあるとしたら、それをどのように乗り越えるかが、これからの大切なステップなのではないかと、取材や皆さんの映像を観る中で、この一週間強く感じているところです。どうもありがとうございました。

#### 【横田】

映像が力を持っている、あるいはメディアが私たちの日常生活に非常に大きな影響を与えているということは、よく知っているのですが、それはどちらかというと、規模の大きいテレビ会社、新聞社、雑誌社などといったメディアが現場を見て感じたことが報道されている。あるいは視聴者、読者が喜びそうなことを念頭に置いた編集の仕方をする。ですから、私たち情報を受け取る側からだと、時々、当事者でありながら、少し違うのではないかと思うこともあります。その時に、OurPlanet-TVは、当事者に立ち上がってもらい、当事者に声を上げてもらって、「メディア、映像を通じて未来を作りましょう」と声を掛けました。その仕組みに私は興味を持ったのですが、先ほどの長谷川さんの映像を観ると、今までビデオを撮ったことがない人が、どうしても伝えたいことがあるのだと、自分で撮影を行う。映像そのものはプロが撮ったものとは違うのですが、しかしそれは別の意味で非常に訴えるものがあります。大変楽しく拝見させていただきましたし、勉強になりました。会場の皆さんも同じような印象を、パネリストのお三方のプレゼンテーションから受けられたと思います。ここで休憩に入らせていただきまして、休憩の時間の中に御質問・御意見を質問用紙に書いていただいて、それをもとに後半のパネルディスカッションに入らせていただこうと思います。

\*このシンポジウムの「基調報告」の様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>